近世後期における貸付資本の存在形態

一 はじめに

世直しが昌揚しつつあった明治初年の正月、品治郡戸手村の土手を歩いていた備中笠岡の宇三郎は、「花月堂」と名のる「浪士籍著者三人に呼び止められ、尋問をうけた。宇三郎は笠岡の胡屋弥左衛門の衣類によって、芦田郡府中市の延藤家へ「病人見舞」に代参し、帰路ごの「浪士籍著者一人に会ったのである。彼らは宇三郎が延藤家へ行ったことを知ると、延藤家に関する次のような話話をあげて宇三郎に本当かどうか詫問した。

この話話をもとにした詫問に対して宇三郎は、「一瓢酒取取、拮抗三等之継之八先年同家賃借へ入貨之分余貨三相成、相違更元之継之八先年同家賃借へ入貨之分余貨三相成、相違更元之継之八先年同家賃借へ入貨之分余貨三相成、相違更元之継之八先年同家賃借へ入貨之分余貨三相成」と詫問されたのであつた。この宇三郎が遭遇した事件には、「世直し」状況下における地域の諸階級対立について、二、三の問題を含んでいる。例えば、花月堂はいかなる階級・階層の利害を代表しているのか、はたちして彼らが述べるようになった日籍、小前屋の利害を弁弁しているのか、また「世直し」騒動における彼らの役割をどう評価するか、さらに「大家」の「施物」あるいは「賃金」がいかに諸階級・階層の対立を

中山 富 広
近世後期における貸付資本の存在形態（中山）

表1 銀額別借金数の推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>年 (1833)</th>
<th>文政8</th>
<th>天保4</th>
<th>天保14</th>
<th>嘉永6</th>
<th>文久3</th>
<th>慶応3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>700,000~</td>
<td>2 (0.7)</td>
<td>3 (0.8)</td>
<td>7 (1.3)</td>
<td>8 (2.0)</td>
<td>9 (4.1)</td>
<td>10 (5.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>500,000~700,000</td>
<td>6 (2.1)</td>
<td>2 (0.5)</td>
<td>15 (2.7)</td>
<td>12 (3.0)</td>
<td>14 (6.3)</td>
<td>8 (4.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>300,000~500,000</td>
<td>10 (1.1)</td>
<td>38 (10.0)</td>
<td>51 (9.1)</td>
<td>79 (19.7)</td>
<td>61 (27.6)</td>
<td>35 (35.5)</td>
</tr>
<tr>
<td>100,000~300,000</td>
<td>15 (5.2)</td>
<td>26 (6.8)</td>
<td>48 (8.6)</td>
<td>39 (9.7)</td>
<td>30 (13.5)</td>
<td>25 (13.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>5,000~10,000</td>
<td>69 (24.3)</td>
<td>86 (22.5)</td>
<td>207 (37.0)</td>
<td>159 (39.8)</td>
<td>57 (25.8)</td>
<td>59 (26.5)</td>
</tr>
<tr>
<td>500~1,000</td>
<td>37 (12.9)</td>
<td>49 (12.9)</td>
<td>39 (7.0)</td>
<td>38 (9.5)</td>
<td>24 (10.9)</td>
<td>14 (7.4)</td>
</tr>
<tr>
<td>300~500</td>
<td>29 (10.1)</td>
<td>38 (10.0)</td>
<td>27 (4.8)</td>
<td>9 (2.2)</td>
<td>6 (2.7)</td>
<td>5 (2.7)</td>
</tr>
<tr>
<td>100~300</td>
<td>39 (13.6)</td>
<td>42 (11.0)</td>
<td>38 (5.8)</td>
<td>33 (8.2)</td>
<td>17 (7.7)</td>
<td>11 (5.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>~100</td>
<td>60 (21.0)</td>
<td>97 (25.5)</td>
<td>127 (27.7)</td>
<td>22 (5.5)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 286 (100) 381 (100) 559 (100) 401 (100) 221 (100) 188 (100)

「年々算用帳」、「天保4年正月正月用帳」、「天保14年正月正月用帳」、「嘉永6年正月書拔帳」、「勘定帳」により作成

表2 延藤家の期首総貸付額内訳

<table>
<thead>
<tr>
<th>(A)府中市</th>
<th>(B)紛田・品</th>
<th>(C)郡・治郡農民</th>
<th>(D)領主・藩士</th>
<th>(E)府付家</th>
<th>(F)家族</th>
<th>(G)総合</th>
<th>(H)総合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文政8</td>
<td>2,486 (0.2)</td>
<td>69,223 (4.6)</td>
<td>58,242 (3.9)</td>
<td>100 (0.0)</td>
<td>363,459 (24.0)</td>
<td>1,019,077 (67.3)</td>
<td>1,512,587 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>天保4</td>
<td>2,663 (0.1)</td>
<td>78,756 (3.8)</td>
<td>155,728 (7.4)</td>
<td>20,000 (1.0)</td>
<td>590,912 (28.3)</td>
<td>1,243,413 (59.4)</td>
<td>2,091,472 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>天保14</td>
<td>6,411 (0.2)</td>
<td>302,876 (8.4)</td>
<td>246,025 (6.8)</td>
<td>32,486 (0.9)</td>
<td>172,641 (4.8)</td>
<td>2,847,883 (78.9)</td>
<td>3,608,322 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>嘉永6</td>
<td>8,870 (0.2)</td>
<td>407,509 (7.2)</td>
<td>73,518 (1.3)</td>
<td>147,742 (2.6)</td>
<td>884,466 (15.7)</td>
<td>4,125,586 (73.0)</td>
<td>5,647,691 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>文久3</td>
<td>1,089 (0.0)</td>
<td>267,022 (3.9)</td>
<td>14,999 (0.2)</td>
<td>816,820 (11.8)</td>
<td>2,254,803 (32.5)</td>
<td>3,575,369 (51.6)</td>
<td>6,930,102 (100)</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応3</td>
<td>3,435 (0.0)</td>
<td>279,087 (3.1)</td>
<td>9,999 (0.1)</td>
<td>1,780,350 (19.7)</td>
<td>3,484,587 (38.7)</td>
<td>3,462,284 (38.4)</td>
<td>9,019,742 (100)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

府中市下層民や府中市周辺の耕農層への貸付をやめているのは、後述するように延藤家が急激に減少してゆく傾向があるが、以上の借金者においても経済的基盤は一定である。
文政八年には福山城下が町を中心として一五家で総貸付金の四一・九九％を占めている（表3）。文政八年より順に列挙すると、三九名、五〇名、九〇名、二七名、五名、四名となり、個別に検討してみると表1でみた〇〇名以下の中細借金者は、彼らとそうでない小作農層がそのほとんどを占めているのである。（b）と（c）への貸付けでは、（b）が小作農層への貸付け、（c）はそこより順に列挙すると、三九名、五〇名、九〇名であり、（a）九〇名をあげると、総貸付金の三八・七七％を占めている。総貸付金の四一・九九％を占めるのは、未還家の農民への負債金である。両者は、文政十四年に最高額を示し、総貸付金の三一・五四％にすぎない。嘉永元年あたりの借り手数は（b）四五名、（c）九八名であり、（a）九〇名をあげると、総貸付金の三八・七七％を占めている。総貸付金は文政十四年より急増している。文政より天保年間にかけてはあまりおこわれていない。この時期の貸付けは、嘉永元年から急増している。四・八％に縮小しているが、嘉永・安政年間から急増している。

このようにして、慶応三年くらいには総貸付金の三八・七七％を占めている。総貸付金に対する増減の傾向を検討すると、従来の農民への負債金は文政十四年、嘉永六年には、それぞれ〇〇家で総貸付金の四一・九九％以上を占めていることがわかる。それに対して文久三年、慶応三年の比率は、〇〇家で一九％であるが、市村亀蔵はじめ五家一五六貫、福田村作蔵の地主・農民、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、およそ府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、のほか府中市の土生屋、林屋、および府中市周辺の田民屋、の拡散、府中市、松原（三原、尾道など）の商業資本家および地主・豪農層が、延藤家の主要な借金者であった（文久年間より領主金融が加わる）とのことがうかがえる。それは延藤家の御
近世後期における貸付資本の存在形態（中山）

表3 額内外の商業資本および地主・豪農家28家の貸付銀

<table>
<thead>
<tr>
<th>地域</th>
<th>氏名</th>
<th>文政8</th>
<th>天保4</th>
<th>天保14</th>
<th>嘉永6</th>
<th>文久3</th>
<th>慶応3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>城下・藤津郡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(1) 羽山利兵衛</td>
<td>75,000</td>
<td>30,000</td>
<td>35,000</td>
<td>49,980</td>
<td>32,200</td>
<td>37,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(2) 鉄屋一族</td>
<td>50,000</td>
<td>180,000</td>
<td>60,000</td>
<td>148,960</td>
<td>20,000</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(3) 川本屋吉兵衛</td>
<td>5,400</td>
<td>65,800</td>
<td>100,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(4) 町屋甚兵衛</td>
<td>20,000</td>
<td>110,000</td>
<td>29,400</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(5) 手塚村喜左衛門</td>
<td>34,196</td>
<td>32,683</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>沼隅郡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(7) 保命酒屋吉兵衛</td>
<td>50,000</td>
<td>80,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(8) 近田屋五郎八</td>
<td>2,000</td>
<td>28,420</td>
<td>8,784</td>
<td>124,580</td>
<td>101,500</td>
<td>307,560</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(9) 大木屋喜代八</td>
<td>100,000</td>
<td>90,000</td>
<td>103,450</td>
<td>69,200</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(10) 入江屋四郎三郎</td>
<td>35,000</td>
<td>85,000</td>
<td>29,800</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(11) 大松屋豊太</td>
<td>30,000</td>
<td>160,000</td>
<td>27,400</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(12) 藤江村熊太郎</td>
<td>30,000</td>
<td>80,000</td>
<td>50,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(13) 水城村前左衛門</td>
<td>102,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(14) 山南村楢平治</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>荒田・品治郡</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(15) 神辺屋一族</td>
<td>186,083</td>
<td>1,294</td>
<td>69,600</td>
<td>7,400</td>
<td>70,000</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(16) 阿賀屋一族</td>
<td>150,657</td>
<td>55,967</td>
<td>118,823</td>
<td>72,470</td>
<td>58,868</td>
<td>167,240</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(17) 隅屋一族</td>
<td>11,480</td>
<td>29,920</td>
<td>196,869</td>
<td>3,920</td>
<td>4,440</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(18) 味噌屋一族</td>
<td>40,000</td>
<td>24,500</td>
<td>6,000</td>
<td>11,760</td>
<td>33,370</td>
<td>226,800</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(19) 西川屋半七</td>
<td>2,646</td>
<td>263,632</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(20) 湯野屋一族</td>
<td>9,310</td>
<td>29,254</td>
<td>31,150</td>
<td>69,400</td>
<td>81,400</td>
<td>29,600</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(21) 新市村目崎屋一族</td>
<td>1,980</td>
<td>1,000</td>
<td>51,780</td>
<td>119,800</td>
<td>171,580</td>
<td>116,360</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(22) 戸手村信岡一族</td>
<td>170,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鈴鹿他</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(23) 油屋元助</td>
<td>15,000</td>
<td>140,000</td>
<td>45,000</td>
<td>756,780</td>
<td>44,710</td>
<td>47,670</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(24) 尾道屋甚屋一族</td>
<td>150,000</td>
<td>309,804</td>
<td>116,400</td>
<td>83,660</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(25) 尾道屋住屋一族</td>
<td>81,600</td>
<td>100,000</td>
<td>111,880</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(26) 松浦屋儀十郎</td>
<td>54,400</td>
<td>41,903</td>
<td>21,502</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(27) 三原川口屋一族</td>
<td>68,000</td>
<td>136,485</td>
<td>42,900</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(28) 笠岡胡屋一族</td>
<td>13,000</td>
<td>48,424</td>
<td>203,833</td>
<td>209,404</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>①合計</td>
<td>633,757</td>
<td>668,038</td>
<td>1,498,806</td>
<td>2,596,390</td>
<td>1,556,839</td>
<td>1,613,156</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>①総 貸付銀</td>
<td>41.9%</td>
<td>31.9%</td>
<td>41.5%</td>
<td>46.0%</td>
<td>22.5%</td>
<td>17.9%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

これらの(1)〜(8)への貸付銀は表2の※その他に含まれる。①の*正銀756.780文は尾道商業資本24家への貸付引受額である。

5
用商に関する成績

(2) 利用状況の分析

貯金の利現収入は、前例したように、貯金家の収入の中
心の位置を占め、年によってはその九〇％に達する場合も多い
った。ここではまず表1の形式にそって、貯金別の利現者数
を概観しておく。文政八年より天保四年までには、表1の傾
向にほぼ照合されているといえる。すなわち貯金者数がそれ
に貯金別分布を表1の額を単位を一括おとと、それ
がそのまま貯金別利現者数である。そこ
が嘉永六年からは、若干実相が違ってくる。
貯金者の借金人である。彼らがこれで払う利現とは、家賃の
滞納分も利息がかかった分である。この利息分だけが一大
還入の一の利方の項に入れられたためと考えられる。

(3) 小括——利現を中心として

貯金の利現の数の推移を示したものである。文化十二
年（一八一五）に一・六％と異常な高さを示しているのは、
この年、貯金金融の利現が一挙に入ったからである。それ
っても文化年間に一〇％以上の利現を示し、文政年間に入
ってもその前半は八九％高く保っている。しかしこ後半
より五六％台まで、暮末までの水準が保たれているが、
貯金者の借金人である。彼らがこれで払う利現とは、家賃の
滞納分も利息がかかった分である。この利息分だけが一大
還入の一の利方の項に入れられたためと考えられる。
近世後期における負付資本の存在形態（中山）

表4 領主・分家および28家の利銭納入
（単位：銭）

<table>
<thead>
<tr>
<th>利銭納入者</th>
<th>文政8</th>
<th>天保4</th>
<th>天保14</th>
<th>嘉永6</th>
<th>文久3</th>
<th>警応3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>領主・藩士</td>
<td>22,728</td>
<td>37,001</td>
<td>17,803</td>
<td>66,661</td>
<td>181,552</td>
<td>212,961</td>
</tr>
<tr>
<td>分家同族</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(1)</td>
<td>5,250</td>
<td>2,100</td>
<td>2,678</td>
<td>3,362</td>
<td>3,450</td>
<td>4,227</td>
</tr>
<tr>
<td>(2)</td>
<td>3,642</td>
<td>12,824</td>
<td>5,251</td>
<td>8,835</td>
<td>1,020</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(3)</td>
<td>40</td>
<td>3,159</td>
<td>4,631</td>
<td></td>
<td>7,800</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(4)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3,013</td>
<td>3,623</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(5)</td>
<td>1,423</td>
<td></td>
<td>8,160</td>
<td>1,001</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(6)</td>
<td>4,851</td>
<td>2,431</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(7)</td>
<td></td>
<td></td>
<td>3,825</td>
<td>4,827</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(8)</td>
<td>100</td>
<td>640</td>
<td>993</td>
<td>18,880</td>
<td>20,394</td>
<td>28,591</td>
</tr>
<tr>
<td>(9)</td>
<td>7,854</td>
<td></td>
<td>7,344</td>
<td>7,925</td>
<td>6,038</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(10)</td>
<td>6,069</td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,415</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(11)</td>
<td>2,448</td>
<td>13,056</td>
<td>4,080</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(12)</td>
<td>4,896</td>
<td></td>
<td>8,609</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(13)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3,774</td>
<td>2,642</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(14)</td>
<td>12,525</td>
<td>24</td>
<td>5,984</td>
<td>256</td>
<td>4,477</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(15)</td>
<td>11,976</td>
<td>2,971</td>
<td>9,614</td>
<td>8,978</td>
<td>4,115</td>
<td>6,303</td>
</tr>
<tr>
<td>(16)</td>
<td>731</td>
<td>2,504</td>
<td>18,419</td>
<td>2,249</td>
<td>362</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>(17)</td>
<td>2,500</td>
<td>2,114</td>
<td>733</td>
<td>709</td>
<td>2,979</td>
<td>10,995</td>
</tr>
<tr>
<td>(18)</td>
<td>154</td>
<td></td>
<td>18,627</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(19)</td>
<td>1,168</td>
<td>3,068</td>
<td>2,488</td>
<td>5,527</td>
<td>5,050</td>
<td>4,902</td>
</tr>
<tr>
<td>(20)</td>
<td>132</td>
<td>1,460</td>
<td>5,347</td>
<td>11,193</td>
<td>12,656</td>
<td>8,489</td>
</tr>
<tr>
<td>(21)</td>
<td></td>
<td>15,137</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(22)</td>
<td>108</td>
<td>9,243</td>
<td>3,891</td>
<td>1,219</td>
<td>2,453</td>
<td>2,159</td>
</tr>
<tr>
<td>(23)</td>
<td></td>
<td>10,914</td>
<td></td>
<td>14,815</td>
<td>3,623</td>
<td>4,008</td>
</tr>
<tr>
<td>(24)</td>
<td></td>
<td></td>
<td>2,402</td>
<td>8,208</td>
<td>6,101</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(25)</td>
<td></td>
<td></td>
<td>7,104</td>
<td>2,264</td>
<td>2,264</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(26)</td>
<td></td>
<td></td>
<td>7,154</td>
<td>6,468</td>
<td>2,264</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(27)</td>
<td></td>
<td></td>
<td>5,930</td>
<td>6,801</td>
<td>10,441</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(28)</td>
<td>82</td>
<td></td>
<td>5,930</td>
<td>6,801</td>
<td>10,441</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑤計</td>
<td>67,333</td>
<td>86,035</td>
<td>142,739</td>
<td>222,338</td>
<td>365,307</td>
<td>329,377</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤／総利銭</td>
<td>63.8%</td>
<td>61.5%</td>
<td>58.1%</td>
<td>?</td>
<td>76.7%</td>
<td>81.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>⑤／借銀</td>
<td>6.75%</td>
<td>6.73%</td>
<td>8.38%</td>
<td>6.13%</td>
<td>7.89%</td>
<td>4.79%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
図1 利銭回収率の推移と期首総合付銀

利率 = 利銭 / 期首総合付銀 + 期末総合付銀 × 100

図2 (2) 貸付銭と利率の相関 (昭和3年)
図2 (1) 貸付銭と利率の相関 (文政8年)
近世後期における貸付資本の存在形態（中山）

①【貸付銀の多いほど利潤が低くなる。②】

1. 貸付銀の多いほど利潤が低くなる。③【貸付銀の多いほど利潤が低くなる。①】

2. 勘定所。松本喜四郎

③【貸付銀の多いほど利潤が低くなる。①】

3. 貸付相手の個別的分析

①【貸付銀の多いほど利潤が低くなる。①】
近世後期における貸付資本の存在形態（中山）

（2）府中市商業資本

在町府中市の商業資本が近世後期から明治初年までにかけて、どのような変遷をたどったのか、とくに天保期以降の商業資本の動向は、府中市における商業資本家がなぜ立ちかなくなっ
たかを示す指標と考えてよいであろう。[14]阿賀屋（姓、

上月）と[16]味噌屋（姓、浦上）は、一八世紀以来の府中市を

代表する「豪家」であったが、[16]は嘉永六年に代銀三貫目、

元治元年（一八六四）に代銀二貫目、[16]は嘉永三年に代

銀四〇貫目、文久三年に石高二石余（完却代銀不明）の家屋

を、それぞれ延藤家に売却している。当村蒲上甚兵衛、去来

方（16）の酒造仕込みが困難となり、天保六年（一

八五九）から延藤家の資金融資を求めていたことわかる。

延藤家は右の条件で資金融資を開始したのであるが、ところ

が『厚く相類候三付口入致是近世話』に対しては未だ未

払収金が残っていた。延藤家から延藤家の資金出

付金を『綿為替銀』（前貸銀）を、『綿為替銀』の決済は、

一応経済巡行の完成として、『綿為替銀』という形でおこ

わかれている。しかしこれも文久二

年十一月ころより、銀子勘定が滞らがちとなり、延藤家は翌

年十月より、銀子勘定が滞らがちとなり、延藤家は翌
年、甚兵衛の継を差押えている。こうして味噌屋甚兵衛は延
藤家に対して、莫大な借銀を負担することとなり、文久三年九
月には一〇〇貫余の額となったのであった。
表3の(1)鹽屋久兵衛は弘化年間に経営破綻において没落
した一人である。
当村隅屋久兵衛は借銀相直り候二、去ル玄徳甚兵衛
具並売取借銀方訳に仕候処、跡相続難出二而、矢張は
迄之通時質仕度候間、成史步安三して貴重一札差入、
本家太郎三郎も厚被相願候
久兵衛は借銀が重なったため、天保十年（一八三九）に家財
道具を売払って借銀を償還したが、経営の黒字が立たなかっ
た。そこで従来より「時時質」と呼ばれて営業するために、
延藤家へ（元銀質提度）と願いでいるのである。延藤家は
これに対し、久兵衛家とは祖孫の代より「悪意」二致候故、
気之三存、承知脅質質残差中質質質、すことした
ところ、久兵衛の質次郎家へ「段々質し候得共、」と思
われる音の出しあないので、代官所へ訴願したの
ところ、久兵衛の質次郎家へ「段々質し候得共、」と思
われた。この事件によって隅屋久兵衛は銀札四貫目
程度を借用しているが（表3）、おそらく何らかの形で細々
とした営業をおこしていたのである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>表6 駿津近田屋の経営収支</th>
<th>安政6年</th>
<th>万延元年</th>
<th>文久元年</th>
<th>文久2年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>古相売利</td>
<td>39,374.67</td>
<td>13,698.74</td>
<td>29,368.56</td>
<td>49,113.3</td>
</tr>
<tr>
<td>金相売利</td>
<td>24,518.31</td>
<td>9,405.13</td>
<td>△312.97</td>
<td>1,954</td>
</tr>
<tr>
<td>解物手引直出利</td>
<td>380</td>
<td>2,371.32</td>
<td>979.09</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>石物手引当利</td>
<td>5,050</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>500</td>
<td>100</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>固収 入計</td>
<td>73,292.98</td>
<td>26,554.25</td>
<td>29,055.59</td>
<td>51,243.21</td>
</tr>
<tr>
<td>固支 出計</td>
<td>50,489.57</td>
<td>47,758.37</td>
<td>36,625.53</td>
<td>31,587.3</td>
</tr>
<tr>
<td>差 引 固－固</td>
<td>22,803.41</td>
<td>△21,204.12</td>
<td>△7,569.94</td>
<td>19,655.91</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）「末歳算用立利欠」（安政6年）、「近田屋古手店勘定帖写」（万延元年）、「西歳勘定建」（文久元年）、「戊年勘定建倉有物書帖」（文久2年）より作成
表7 近田屋の古手売上利と借銀・取替銀

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>安政6年</th>
<th>万延元年</th>
<th>文久元年</th>
<th>文久2年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>原</td>
<td>39,347.67</td>
<td>39,347.67</td>
<td>39,347.67</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>原</td>
<td>489,418.01</td>
<td>489,418.01</td>
<td>489,418.01</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>原</td>
<td>13,689.74</td>
<td>13,689.74</td>
<td>13,689.74</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>原</td>
<td>450,043.34</td>
<td>450,043.34</td>
<td>450,043.34</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) 表6に同じ
表 8 差配人をとおした尾道商業資本への貸付銀

<table>
<thead>
<tr>
<th>年 月</th>
<th>貸付額</th>
<th>対資産比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>嘉永3年正月</td>
<td>1,520,818</td>
<td>27.3</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 4年 &quot;</td>
<td>1,742,793</td>
<td>29.3</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 5年7月 &quot;</td>
<td>1,759,872</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 6年正月 &quot;</td>
<td>967,459</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7月 &quot;</td>
<td>1,638,685</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安政元年正月</td>
<td>594,063</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7月 &quot;</td>
<td>529,859</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 4年7月 &quot;</td>
<td>400,770</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 5年正月 &quot;</td>
<td>454,046</td>
<td>7.1</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 6年正月 &quot;</td>
<td>575,293</td>
<td>8.7</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7月 &quot;</td>
<td>501,588</td>
<td>7.5</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7年正月 &quot;</td>
<td>515,299</td>
<td>7.2</td>
</tr>
<tr>
<td>万延元年7月</td>
<td>515,143</td>
<td>7.1</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 2年正月 &quot;</td>
<td>465,086</td>
<td>6.3</td>
</tr>
<tr>
<td>文久元年7月</td>
<td>455,322</td>
<td>6.2</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 2年正月 &quot;</td>
<td>500,718</td>
<td>6.6</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7月 &quot;</td>
<td>471,063</td>
<td>6.1</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 3年正月 &quot;</td>
<td>467,786</td>
<td>5.8</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 7月 &quot;</td>
<td>462,919</td>
<td>5.7</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 4年正月 &quot;</td>
<td>461,299</td>
<td>5.5</td>
</tr>
<tr>
<td>元治元年7月</td>
<td>450,017</td>
<td>5.2</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 2年正月 &quot;</td>
<td>437,735</td>
<td>5.0</td>
</tr>
<tr>
<td>慶応元年7月</td>
<td>429,695</td>
<td>4.8</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 2年正月 &quot;</td>
<td>431,368</td>
<td>4.6</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 3年 &quot;</td>
<td>432,965</td>
<td>4.4</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 3年7月 &quot;</td>
<td>445,715</td>
<td>4.6</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 4年正月 &quot;</td>
<td>499,850</td>
<td>5.2</td>
</tr>
<tr>
<td>明治2年 &quot;</td>
<td>408,318</td>
<td>4.2</td>
</tr>
<tr>
<td>&quot; 3年7月 &quot;</td>
<td>394,161</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）各年度「算用簿」「勘定帳」による。
近世後期における貸付資本の存在形態（中）

表9 尾道・竹原屋の経営（嘉永6年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>回</th>
<th>総体</th>
<th>休借</th>
<th>高貸</th>
<th>金換算</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A一</td>
<td>10,792</td>
<td>1,700</td>
<td>9,092</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>A</td>
<td>4,244.56</td>
<td>8,114.37</td>
<td>5,672.57</td>
<td>202</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>1,198.75</td>
<td>951.47</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>振込</td>
<td>266</td>
<td>248</td>
<td>276</td>
<td>62</td>
</tr>
<tr>
<td>持替え</td>
<td>141</td>
<td>853</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>汎用利払い</td>
<td>0.66%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>汎用利払い</td>
<td>3.46%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）（高橋氏『信貴書写抜』（新改革尾道史）より作成

嘉永6年（1853年）における尾道・竹原屋の経営状況を示す。金換算の数値は、尾道・竹原屋の貸付金額を表している。

嘉永6年（1853年）の尾道・竹原屋の金換算金額は、総体で10,792、休借で1,700、高貸で9,092となった。具体的な数値は以下の通り：

- 振込金：266
- 持替え金：248
- 汎用利払い：276
- 汎用利払い：62
- 汎用利払い：141
- 汎用利払い：853

このように、尾道・竹原屋は、一定の金額を振込し、持替えを行い、また、金利を払い、さらにその金利を振込む形をとっている。尾道・竹原屋は、貸付金の管理と運用に非常に注意を払い、金利の管理も十分にされているところである。

構造的に、尾道・竹原屋の貸付金は、休借、高貸の2つのタイプに大別されており、休借の部分は、振込金で266、持替え金で248となっている。一方、高貸の部分は、振込金で276、持替え金で62となっている。このことから、尾道・竹原屋は、休借と高貸を、各々の目的に応じて運用していることがわかる。

また、金利は、振込金で0.66%、持替え金で3.46%という、非常に高いレベルである。金利の設定は、尾道・竹原屋の経済状況や市場状況を反映しているものと考えられる。

尾道・竹原屋の貸付金の運用は、非常に厳密であり、金利の管理も十分に行われている。これにより、尾道・竹原屋は、安定した経済活動を遂行していることが明らかである。
四おわり

幕末期における延藤家の経済活動は、地主・貸家経営を除
くと、そのほとんどが貸付銀行を中心にとする金融活動であり、
まさに「貸金」を主業務としていた。その貸付相手は、以
上で述べたように、生産者農民や府中市下層民を含む広範な階
層にわたっていたが、天保期を過ぎるころより、生産者農民
や府中市下層民が貸付対象から除外され、政府に各地の商業
資本家に限定されていった。また延藤家と取引のあった各
地の商業資本家を検討してみた場合、有数の商業資本家は別
の破綻に直面していることが明らかとなった。これらの商業
資本家の経営破綻の原因については個別に考察されねばなら
ないが、ともかく延藤家は可能な限りそれらの商業資本家に
融資を行いつつも、他面では領主権力を利用しながら利潤を
取立ててある場合には抵当物件を差押える。ということことでそ
の経済活動においても、延藤家の経営の特質におよぶ当地域における金融の動向をよ
くとらえていることができる。すなわち彼らは、延藤
家に貸す資金に課す金利は二段階である。延藤家の破綻を招き
める二段階の金融関係を把握していたと思われ
る。延藤家の商品市場への介入（貿易等）が、他の商業資本
家につながる。したがって延藤家は他の商業資本家に金利
をおかせており、そのことが結果的に「小前立難渋」に
つながる。したがって延藤家は他の商業資本家に金利
をつけるための手段をとっている。それは彼らの言動を文面通りに
この点、様々な検討を経なければならないが——
日頃——「小前立層
6190091717535510

 учетная политика (аудиторские проверки) (аудиторские проверки) (аудиторские проверки)

(имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия) (имя и фамилия)
The State of a Usurer’s Capital in the Late *Edo* (江戸) Period:  
a Case Study of the *Nobuto* (延藤)  
Family in *Fuchu* (府中), *Bingo* (備後)  

by Tomihiro Nakayama

In the Late *Edo* period, the *Nobuto* Family was mostly engaged in financial business, especially loaning silver, besides owning the land and renting houses. They loaned people who were from different classes of the hierarchy, including the peasants and the lower classes in *Fuchu* City. However, since the *Tempo* (天保) Era, they intentionally had not been loaning the peasants and the lower classes, and limited customers to commercial capitalists in various parts by degrees. Many of the commercial capitalists who the *Nobuto* Family dealt with could not adapt themselves to economic change in the *Meiji* (明治) Restoration and faced breakdown economically except for only a few outstanding ones. The *Nobuto* Family financed those commercial capitalists as much as possible while they charged interest, taking advantage of the lord’s authority. They seized mortages when the customers could not pay them back. After all, the *Nobuto* Family had intended not to loan the peasants, the lower classes, the small commercial capitalists, and the ruined commercial capitalists; but, by contrast, the number of the renters had decreased to 188 in 1867 even though the amount of loans had increased.